

會



報

1965年7月

241

日本山岳会

エベレスト計画の延期

松方三郎

来年に迫っていたエベレスト計画を延期するの止むなきに至ったことは、かえすがえすも残念なことだ。残念なことだが、何ともならない事情によって、そうなったと考えれば、今日のところ、情勢の好転をまつ以外に方法はない。

山登りをしているお互い同志の間でのことならば、政治情勢だの国際情勢だのということとは、何のかかわりもない日本の国の中の山登りでも、これに似たような場面にあつかることは、幾らでもあることを説明する必要はない。一荒れ荒れただけで、頂上を目の前にして下るのほかなし、といった目に会うことも珍らしくはないからだ。

しかし各方面の支持や協力を得て、外国までいって山に登るとなれば、そう話は簡単ではない。日本山岳会としては、その意味で、これまでお世話になった各界の方々に對し、この間の事情を十分説明して、諒解を得るよう、手を尽すつもりである。

ネパールの事情が何時、どのように展開するか、今のところ見当はつかない。いろいろと伝えられてはいるが、いずれも単なる憶測の域を脱しないものだ。われわれとして今日なし得ることは、何時

新しい情勢が展開しても、直ちにそれに応じ得る態勢を整えておくことと、そうした新情勢の一日も早く来らんことを期待し、希望するだけのことだ。

インド隊がエベレスト登頂に成功した今日、日本山岳会の計画に何等かの変更があるのではないかと、ということという人もないではないが、インド隊の今回の計画のあることは、われわれとしても数年前から知っていたことだ。インド隊が成功したからといって今更考え方が変わるわけのものではない。

エベレストの高さが八八四八メートルである限り、やはり一度は登らねばならぬ山だと思ふし、それをするにによって、何かわれわれも、新しいものをさらに加えることができると考えているからである。

頂上に到達することだけが問題なのであれば、エベレストの問題は、一九五三年の英国隊の登頂で既に解決済みなのだ。あえて今回の、インド隊の成功を待つまでもない。

計画を延期するということは、時間の上で予期せざる余裕を与えられたということだが、ここであらうろろしていると、折角与えられ

た時間を無駄にしてしまわないでもない。あとで悔むことのないよう、もう一度時間割を組替えて、将来のため段取りを十分検討し、整えておくことが、今日の場合、一番大切なことだと考える。

英国はエベレストに

登るために三十人待った。フレッドの時から数えれば、さらに長い年月になる。その間に大きな戦争が二つも入っている。スイスにしても何年かかけているし、今度のインドの場合で

目次

エベレスト計画の延期……………松方三郎……………一

エベレスト委員会経過報告……………二

連休の遭難……………三

(一) 遭難事故の概況……………相沢裕文……………四

(二) 遭難事故に対する考察……………辰沼広吉……………四

第三回海外登山技術研究会報告……………五

登山の今昔……………神谷恭……………六

ウェストン祭……………日高信六郎……………六

エベレスト(インド隊)成功の一因……………種谷代理大使……………七

アイガー北壁日本隊覚え書……………七

会員通信(一)……………八

ダウラギリII峰(一九六五年)……………沖允人……………八

札幌来訪の松方さん……………高沢光雄……………八

ガンガプルナのサイン……………八

会員通信(二)……………九

マカルー登山許可の交渉……………石原国利……………九

ネパール山岳会規定……………一〇

天山に又一つ、七〇〇〇m級……………一〇

会員通信(三)……………一一

中村保・高島誠・風見武秀……………一一

神原達・防衛大・全岳連(大阪)……………一一

海外情報(一二)・会務報告(一二三)……………一一

ちがあると考えられるからなのだ。われわれもこの点、正に同じ考え方だといっている。日章旗を頂上にかかげよう、などというのではないが、われわれ

にはわれわれなりの登り方があると思うし、何はともあれ八八〇〇メートルの上空に聳える頂上に、自分の足で立ててみたい。英国もアメリカも、スイスも、あの空の一角から貴重な資料をもたらして

三田副会長が昭和三十八年五月にカトマンズを訪問し、エベレスト登山許可の内諾を得るまでのことについては、会報二二八号に詳しくでてゐるが、それ以後、今回の一九六六年度エベレスト登山延期決定に到る迄の経過につき、その概要を報告する。

(二・二) 第一回エベレスト委員会開催、規定(案)の内容を検討常任委員の互選が行われた。その結果常任委員として、加藤泰安、小原勝郎、折井健一、辰沼広吉の四名が推薦され、折井委員として日高信六郎氏及び各支部長を追加委嘱することに決った。その後本件は(二・五)の理事会で承認された。

◇(三九・一二八) 常任委員会を開催し、各委員及び海外登山の経験者を出し隊長選任についてのアンケートに對し隊長選任することをきめ、準備することになった。

(二・二八) 常任委員会開催。アン

アンケートは(三・四)に發送され
た。

(四・六) 常任委員会を開催隊長選任についてのアンケートの回答を分析し、具体的人選につき更にアンケートを発送することを決めた。

(四・一七) 常任委員会。エベレスト委員会の委員として新たに、今西錦司、入沢文明、篠田軍治の三氏を追加

は(五・七)の理事会で承認された。
(四・二五) 昭和三十九年度総会の

席上、榎委員長より次の様に報告があった。

「エベレスト登山については(1)時期

は一九六六年度ブレモンズーン期。但し必要に応じ一九六五年秋に先遣隊を送ることも考えられ、この手配も済ま

せてある。(2)登頂を主たる目的とするものであるが、科学班の参加も考慮している。(3)隊長推挙についての大綱

も、委員並びに経験者各位より寄せられた希望条件を考慮して、協議の上決定したい。」

(四・二七) 第二回のエベレスト委員会を開催。アンケートの回答を整理

人選についての更に具体的なアンケートを送ると共に左記事項を決めた。

(1) 一九六六年度エベレスト登山隊は登頂を第一目的とし、これに関連する科学調査を従つて、科学調査の目標は、高處に於ける医学、気象学、地球物理学の範圍に止め、右調査研究と相俟つて酸素補給器を使用しない登頂も考慮する。

(2) このために隊は相当大規模となることを予想する。

(3) 登山の時期は一九六六年プレモンスーン期とする。

(4) 毎日新聞社に後援を依頼する。

(5) 募金事業は、日高、早川両氏を中心として更に具体案を作成する。

(四・二八) 常任委員会を開催。隊

送した。
(六・九) 榎委員長の諮問により、

(六・二三) 常任委員会を開催。隊長長推挙に関する長老会議(榎田、日高、松方)が行われた。

(六・一七) 隊長として松方会長を推挙し、その旨委員に通知することになった。

(六・二三) 緊急理事会開催。植委員長より次の様に報告があった。
四月二十七日開催の委員会にて決定

された諸事項を勘案の上、隊長候補者二名以内の推薦を各委員並びにヒマラヤ有識者に依頼の結果、三十九通の回

答を得た。これらを充分参考として、日高、松方、三田氏とも諮った結果、松方三郎氏を隊長とし推薦致し度い」

この提案は、全員賛成の上、正式に決定した。

(同日) NHK教育局教養部長、川

原正人氏より、植委員長宛エブレスト登山を後援致し度い旨の申入れがあった。

(六・二四) 榎委員長、日高、三田、折井各委員は毎日新聞社に梅島専務を

方を申入れた。同日常任委員会を開
催。募金委員会設置についての検討を

行い、募金委員長を日高氏にお願いすることを決めた。

(七・一八) 常任委員会開催。エベレスト登山についての予算案を検討し、併せて文部省、毎日新聞社、NHK等への交渉方法につき検討した。

(七・二三) 常任委員会。登山隊の機構につき検討。

(七・三〇) 常任委員会を開催。組織委員会設置についての検討がなされた。

(八・八) 植委員長の諮問により、村木、大塚、松田の三名が、隊の組織について意見を求められた。

(八・九) 常任委員の間で、今後の

(八・一〇) 常任委員会。加藤泰安氏を委員長とする組織委員会設置につ

(八・一八) 常任委員会。八月十日の委員会で検討された組織委員会の機構を改めて次の如く決定した。

(1) エベレスト組織委員会を設ける。
(2) エベレスト組織委員会は、本部

(3) 本部長に三田幸夫。本部員は松方、小原、加藤、辰沼、折井、深田のと各委員をもって構成する。

(4) 常任委員に深田久弥氏を追加する。

(八・二七) 組織委員会を竜名館にて開催。村木、大塚、松田も招集される。

辰沼委員より、本委員会についての説明がなされた。即ち委員会の構成は下図に示す通りである。特徴として

は、特定の事務局長をおかず本部が複数にて行うことにある。

準備を行うことにあり、隊員決定の時期にはこの組織から隊が独立することとなる。

（九・八）加藤、辰沼、松田の三名、文部省を訪ね、助成金一五〇〇万

The organizational chart of the Japanese Alpine Club (日本山岳会) is structured as follows:

- 日本山岳会** (Japanese Alpine Club)
 - エベレスト委員会 委員長 (槇)** (Everest Committee, Chairman (Aki))
 - 募金委員会 委員長 (日高)** (Fundraising Committee, Chairman (Hinaga))
 - エベレスト委員会** (Everest Committee)
 - 登山隊** (Alpine Team)
 - 組織委員会** (Organization Committee)
 - 本部** (Headquarters)
 - 本部長 (三田)** (Headquarters Chief (Mitsuda))
 - 本部員 (松方, 加藤, 小原, 折井, 辰沼, 深田)** (Headquarters Members (Matsumata, Katoh, Kohara, Orii, Tannozumi, Fukuda))
 - 企画** (Planning)
 - 総務** (General Affairs)
 - 装備** (Equipment)
 - 食糧** (Food)
 - 学術** (Academic)

(九・一七) 組織委員会、資金調査方法につき検討を行う。

(九・二四) 組織委員会開催。

(1) 資金調達、外貨枠の問題につき協議、体協のスポーツ外貨枠では額が大きすぎるので一般外貨の別枠を検討

(2) 科学研究助成金は、ユネスコ組織の中の I・B・P (International

(3) 組織委員会実行委員は十月中旬 Biological Program)にも働きかけることを決める。

(4) 隊の名称を The Everest Expedition 1966 of the Japanese

Alpine Club と決定する。
(10・1) 常任委員会。毎日新聞社の後援が九月二十六日、次のよう

決定した旨。楨委員長から報告された。即ち

収益一、〇〇〇万円を集めることを約定した。但し映画については別途研究する。

(一〇・八) 組織委員会開催。毎日新聞社の決定に伴いNHKに対する対策を協議。(三〇) 五日の日本共産党の主張を聞き、(三〇) 五日の日本共産党の主張を聞き、

策を協議し、三〇〇万円の申入れを行ふことを決定した。

(一〇・一三) 榎委員長、折井委員

の両名、NHKに川原教養部長を訪ね、「NHKより申入れのあった後援の件につき山岳会として正式に受諾したことを報告、援助方要請した。」

(一〇・一五及び二二) 常任委員会開催。エベレスト組織委員会実行委員として、村木以下六十八名を内定リスト・アップした。(氏名略)

そしてこの中よりとりあえず、企画委員として次の七名をきめた、企画委員として、大塚博美、松田雄一、住吉仙也、宮下秀樹、岩坪五郎、平林克敏。

(一〇・二九) 第三回エベレスト委員会開催。組織委員会設立に関する経過報告、予算案、資金調達状況、実行委員推薦状況等につき詳しく報告がなされた。

(一一・一二) 組織委員会を開催。関西在住の三名の実行委員も上京し組織委員会として初の顔合せを行った。翌十一月三日、実行委員のみにあつた企画委員会を開催。今後の運営法、関西との連絡法その他につき具体的打合せを行った。尚実行委員の分担は次の通り、決定した。

企画—村木以下七名
総務—松田・平林 (関西)
装備—大塚
食糧—宮下・岩坪 (関西)
医療・酸素—住吉

(一一・一二) 組織委員会を開催。実行委員会今後のすゝめ方につき検討し、早急に事務費の確保と事務所を開設することを申合せた。尚月別支出予定表を作成、植委員長に提出することになった。

(一一・一九) 組織委員会開催。前回の委員会で決めた収支予算表につき植委員長の意向を入れて再検討し、予算の使用方を長期間に亘って冗漫にするのではなく、出発前に重点的に支出する様修正する。毎日新聞社としては新春の社告に発表したい意向をもっているため、早急にNHK、国庫補助の

見通しをつけることに努力することを申合せた。

(一一・二二) 組織委員会開催。NHK大蔵省に対する交渉方法につき協議した。尚十二月月上旬水野野間西支部長が、インド、パキスタン旅行の途次カトマンズにも寄られるので、ネパール外務省に対し、JACとしての挨拶を依頼することにした。

(一一・二〇) 組織委員会開催。資金調達の問題につき協議した。

(一一・二七) 組織委員会開催。資金調達並びに実行委員のすゝめ方につき検討した。毎日新聞社の新春社告発表は、NHKが決まらないため延期することに決定。

(一一・二三) かねてより申請中の文部省助成金が復活要求で八〇〇万円と内定した。

(一一・二四) 組織委員会開催。NHKの正式後援が金額の点で未定なので文書を以て申し入れることにした。尚水野野間西支部長の訪ネの報告に基づき、正式なバーミッシュの入手手続きにつき検討した。

(四〇・一七) 組織委員会開催。NHKに対し後援依頼の文書を提出することにした。資金調達状況に伴う、免税指定の申請、募金委員会の具体案につき協議した。

(四〇・一六) N・ディレンファース氏来日。エベレスト登山の諸問題につき情報を交換する。二十一日には国際文化会館に於て組織委員会のメンバーを主としてディレンファース氏を囲む懇談会を開催、高所医学の問題等について質疑応答並びに意見の交換が行われた。

(一一・二八) 組織委員会開催。事務所を今西組東京支店三階に借りること。資金調達問題等につき協議した。

(一一・二九) 常任委員会開催。募金委員会委員長を引受けておられた日高信六郎氏が辞退されたので、代つて植委員長が推薦された。尚組織委員会の事務所として、今西寿雄氏の好意により、新宿区内藤町一所在、今西ビルの一階約二十坪を借りることになった。

(一一・二五) 組織委員会開催。NHKの決定を待つて募金活動を行うことを確認。

(一一・二四) NHKの後援が決定。後援金五〇〇万円、取材費一五五〇万円(テレビのみを対象としNHKより二三名派遣)で協力したい旨回答があった。

(一一・二七) 組織委員会開催。NHKの態度も決まったので本会としても具体的準備を開始することになり、種々の打合せを行った。募金委員会は事務局長古市美津雄氏。収納責任者は望月達夫氏にお願いすることを決めた。尚ネパール政府に提出するアプリケーションに必要な隊員名は隊長が選考するよう要請した。

(一一・二二) 組織委員会。募金事務の件、経理事務方式の件等、具体的に検討、併せて組織委員会は本部を解散して、松方委員長、加藤事務局長の線で一体化する案が討議された。尚エベレストの名称が今迄統一されていなかったが、今後はエベレスト、標高は八八四八mと統一することになった。

(一一・一六) 毎日新聞関係者と会談、現在迄の経過報告、募金案、今後の運営方法等につき説明し、映画、取材問題等、エベレスト登山実施に関する細目の打合せを行った。

(一一・一七) 東京クラブに於て松方、加藤、辰沼等により隊員候補者選考についての検討が行われ、約四十名の隊員候補者を上げて実行委員会を組織し、ネパール政府に提出する隊員名簿にもこの中より選定することを確認した。

(一一・一八) 第四回エベレスト委員会開催。これまでの経過並びに四月一日より事務所を開設して具体的準備をすゝめる予定であること等が報告された。尚今後三、二〇〇万の募金をしなければならぬことを確認し、募金委員会を設置することについての了解を得た。募金委員には植委員長以下、早川三三、西堀栄三郎、今西寿雄、折井健一、水野祥太郎、織内信彦、小原勝郎、島田興、三田幸夫、望月達夫、加藤泰安(願不同)の諸氏に委嘱したい旨の発言があり、了承された。

(一一・一九) ネパール政府は突如としてヒマラヤ登山を全面的に禁止する旨を発表した。

(一一・二二) カトマンズ発の各外電は一斉に禁止令を伝えてきたが、この中には、エベレストを除くというものの、エベレストも含まれるというものの等種々あつて困惑した。

(一一・二三) 加藤、辰沼、大塚、松田等は直ちに外務省を訪ね、事情調査方をお願いすると共に今後の協力方を要請した。又、デリーの板垣大使宛にも事情調査方を打電した。

(一一・二三) 臨時在京エベレスト委員会を開催。たゞ／＼カトマンズより帰国した神原達氏を招き、現地の事情を聴取し、今後の方針について検討した。いづれにしても外電のみでは正確な状況の把握が困難であり、状況確認の後、具体的な対策を立てることをきめ、委員会終了後、文部省、NHK等を訪問し事情説明等、会の態度を表明した。

(一一・二五) 組織委員会開催。後の情勢につき検討、当会より人をカトマンズに派遣するか否かについて協議した。デリーの板垣大使には松方会長の私信をもつて詳しく事情を説明し、調査のポイントを明確にさせることにした。

(四・一) 常任委員会開催。後援の決定している文部省、毎日新聞社、NHKに文書をもつて事情を報告し、今暫く猶予をお願いする申入れをすることを決める。

(四・八) 組織委員会開催。後援者、募金、酸素装備の輸入等の問題を考慮すると、七月になると準備が間に合わなくなる。現地交渉の点は、板垣大使に一任してあるので、大使の諒解を得てからにすることがある。

(四・一五) 組織委員会開催。現地への交渉員派遣の問題について協議した。

(四・一五) カトマンズ滞在中の石原東海支部長より来信。カトマンズ情報につき概要説明が届いたが、禁止の理由は公表されていない由。

(四・二三) 組織委員会開催。板垣大使は五月中旬に公館長会議で帰国されるので、現地交渉者の派遣は、大使が帰国される迄待つことにする。現地交渉を行った結果、一九六六年度プレモンズ期はノーという結論が早くでるかも知れないが、それでも派遣した方がよいことを確認。その場合には再開第一回目の許可を取りつける確約をしてくるだけでも意味がある。

(四・二三) 外務省情報文化局(デリーより公電あり)「ネパール大使館を通じて交渉中だが要領を得ないので、日本山岳会より交渉のために日高前会長が来られることは、時日も迫っていることでもあり、非常に賛成であります」

(四・二四) 総会に於て松方会長より経過説明が行われた。

(五・一四) 第五回エベレスト委員会開催。現在迄の経過報告がなされ、日高氏の訪ネを了承した。尚会員加藤喜一郎氏が五月十五日商用でカトマンズにでかけるがこれに先立ち、植委員長は加藤氏を訪ねて、種々状況調査方を依頼した旨の報告があった。

(五・一七) 帰国直後の板垣大使に

(15頁へ続く)

第三回 海外登山技術研究会 報告

昭和三十九年度の掉尾を飾る行事として吾妻山麓新野地温泉、相模屋において、三七、三十八年度に引き続き、日本山岳協会主催、文部省後援の海外登山技術研究会が、松方副会長以下六五名の参加を得、四月二十九日より五月二日迄の四日間、地元福島支部の協力の下、盛大に開催された。

第一、二回とは趣を変え、前年度の遠征隊の記録発表を中心に活発な論議が展開され、我国登山界の海外遠征に対する熱意の並々ならぬことを改めて痛感すると共に、その水準も欧米諸国に決してひけを取らぬ迄に高まった事が感ぜられた。

第一日 雨、終日講義

一、現地責任者松方副会長挨拶の要旨。

年に一度の貴重な機会であるから、皆さん大いに親睦を深め、楽しい会にして欲しい。と同時に、風俗、習慣、宗教等の異なる地域への海外遠征に、登山技術以外とも云える心掛け、慎重な配慮、準備を、この会で是非非取り上げて欲しい。

一、研究会の趣旨、辰沼実行委員長

将来の海外登山発展のため、衆知を集めて海外登山の在り方に就き、色々な角度から検討したい。

一、自己紹介 略

一、海外登山のあり方、堀田弥一氏要旨。

一九三六年、当時の我国登山界の行詰りを打破し、初登頂の魅力と我々の実力がヒマラヤでどこ迄やれるかを知る目的の為に、ナンダコットの遠征を計画し、周到な準備を行った。結論として日本の冬山を自分で切り拓いて行った人達なら充分対処し得たし、タクトイクスの問題にしてもパウアーの影響が大きかったが、本に依る知識ではじめて実地に有機的、組織的動きを実践したが、比較的うまく行った。

物を教わると云うことは近道で、安易であるが、もっと積重ねられた経験を重視する気持ちを忘れないで欲しい。将来いくらか数多くの隊が出るにせよ、一隊一隊が充実したものでないと全体の充実にはならないから、広い意味での海外登山の研究を期待する。

一、立教大学ヒマラヤ踏査隊（バルン氷河）報告、大倉昌身氏
シルパの程度が悪く、バルンツエでは雪庇の状態が悪かった。

一、大阪市立大学ランタン・リルン遠征隊報告、清原鉄也氏
リルン氷河は雪崩の巣の様であり登路として採用出来ぬと思うし、南稜ルートに五七五〇米迄試

登したが、途中デポ地もない急峻なルンゼ、やせた岩稜で前進不可能と思う。

一、アンナプル南峰 京都大学山岳部・樋口明生氏
学生主体の隊であり、その選考も学生間で自主的に決定された。

若くて強かったようである。

一、ニュージールランド（タスマン氷河）登山。西山会、伊藤尤士氏。
クックは天候に恵まれず技術的に非常に難しい。シーズンには十二月初めより一月一杯。日本人として初登頂である。

第二日 小雨後薄曇り、講義後外出。
一、ギャチュンカン隊
映画「ギャチュンカン登頂」を見た後、古原和美氏より報告。

長野県岳人だけでは経験の不足を感じたので二名を県外から補強したが、出発前三回に亘る合宿でチームワークは懸念なかった。プレモンスーンの早い時期に好天があると予想し、氷河の荒れる前にルートを確保すべく、三月初めB

C建設を目標とした。が、唯一のルートと思われるC4より上の大クローワールは、降雪があれば必ず雪崩れる処であったが、予想通りの好天と短期間のアタックで登頂に成功出来た。スリッパ事故で大滝隊員を失ったが、全員登高は続行に一致したので直ちにアタックの指令を出した。七、〇〇〇米

を越すと大分高度の影響が現われたが、視神経を犯された二名は単に高度の影響でなく、当時大流行していたインフルエンザのウイルスの影響が大きいと思われる。

一、午后より吾妻スカイラインをバスで登り、蓬来山の斜面でスキーを楽しむ。

一、ボリビア・アンデス報告、東京外語大山岳会 向一陽氏
約五ヶ月間で二十座に登り、十五峰が初登頂であった。

ボリビアでの通関は食糧品の持込がウルサイが、チリーのアリカ経由で行くと楽である。帰国時、一隊、一日十ドルの入山料を請求されたが、ボリビア山岳会が勝手に決めたものであるので充分注意されるよう。

一、ローガン 関西学院大学山岳部 千田一夫氏
学生のみ七名の構成で出掛け

た。
一、ローガン 学習院大学山岳部 川崎巖氏
学生の夏休を利用して得るし、非常に距離感が無いとも云える。

一、同志社大学アラスカ学術調査隊報告、代理津田康裕氏
現役を主体にし、夏山合宿の延長のつもりで、ブラックバイン及びリーガルに登頂した。

第三日 晴 外出後講義
一、前日同様浄土平迄バスで行き、東吾妻スキー行、昼食後下

（前頁より）

長として誰もが知るべき知識であり、またそうあるべきである。

然しそれには現在の学校制度から考えると、多くの問題があるが、基本的にはそう考えた。単に講習会、研究会で得られるものは、表面的な技術であって、基本的には若年層に深く刻み込まなければ結果は望まれない。
（辰沼広吉）

山。

一、ヒンズー・クシュの山について 吉沢一郎氏
最高峰ティリチ・ミールを含む六、〇〇〇米以上の五二峰（未登山一〇）に就き詳細な説明が行われた。

一、アルパータ報告 川口市山岳連盟 村田実氏
三年間の準備期間を置いて十三名で出掛け、目的の親善は果し得た。アルパータはボロボロの水成岩と堅い岩が交互に現われ、登頂には失敗したが、ルートファイディングとか、バランスクライミング等のオーソドックスな登り方の必要性を痛感した。

一、一九六五年 ローガン隊計画発表、防衛大山岳会 田代儀雄氏
川上隆氏を隊長とし、八名で六月より二ヶ月半の予定で北稜からアタックする。
（六頁下段へ）

随想

登山の今昔

神谷 恭

今の山登りについてはここに

いでの皆さんの方が十分御存知のことですので、今日は古い話をいたしましょう。不確かな所があるかも知れませんが御容赦願います。私は明治二十三年に信州の大町に生れましたので、母親の胎内にある時から山の影響をうけたのかも知れません。山との縁は初めて三國峠を越えたのが明治二十四年ですが、母親の懷に抱かれ馬で越えただけですから何も覚えはございません。もっとも、木暮・田部先生などがおおいでになった「秩父会」での席上でこの三國峠越えの話が出ました時、木暮先生が越えられたのが明治二十六年の由です。私の方が二年ばかり先になる訳です、と大笑されたことがありました。

私の父は農商務省の官吏でしたので転任が多く、私は三才で上京し、その翌年九州に移るような各地を転々とした生活でしたが、小学校を十五才で終了して後は独学で年を過すような次第で、山登りもその頃から興味をもち始めたように思います。

というのは、その頃の日本山岳会は英国山岳会と同じように名士貴族の会員が多く、私のようなものには高嶺の花のように思われていたのですが、偶然にも兄の友

人に中村清太郎、加賀正太郎さんのような立派な方がいて、その人達が遊びに来られては面白い山の話を聴かせて貰えたものです。

当時は、奥多摩や富士山行きの小遣いも一年がかりで漸く貯める程度で、今のよう立派な指導者もなく、日本山岳会にはもちろん入れずにいましたが、兄に連れられて展覧会や小集会にはよく出ていきました。

私が山岳会へ入会したのは一九一九年、赤城山に登りましたが、登山靴などはもちろんなく、わらしきやはんは人力車夫の使った灯油紙の雨合羽か糸立（着こぎ）をもつて出かけて行きました。リュックサックなどありませんでした。リュックサックでリュックサックを背負った外人を見たことがありました。その後しばらくして勤め先の外人に貰って背負っていた私のポケットなしのリュックサックを皆さんが真似して作ったものです。

小島鳥水、高野鷹蔵氏や綿谷・竹下氏などの古い初期の会員を知りましたのもちょうどその頃で、私の入会には加賀・中村両氏に紹介していただいたのです。奥多摩や大菩薩周辺にはしょっちゅう出かけました。

日本山岳会の過程を三つに分けると、一、虎の門時代、二、お茶の水時代、三に現在の外苑コーポ時代となると思いますが、虎ノ門時代以前は会の事務所を会員の自

宅へ持ち廻りで転々とさせたもので、当時木暮先生のお宅を訪ねたりすると、あのがしりした鐘撞きの先生が実に親切丁寧に教えるくたさ、つい夜を更かき、時には、お子さん達の眠っている床の上をひそかに乗り越えて帰ったりしたものです。当時先生は本郷千駄木町にお住いで山岳編集所になっていました。

その頃から私の山に対する憧憬は人並はずれて、いわば山に憑かれたという状態でした。山だけにあらゆるものを犠牲にしても惜しいとは思いませんでした。自分の子供五人もほとんど私が山へ行ってゐる間に生まれたような次第です。

いったいに私達の間では子供の名前に山に関連する名か山の名を冠するものが多く、一種の気違いあつかいを世間からされたようですが、御本人達は一向構わず山に夢中になっておりました。

その頃日本山岳会の会員の間に同好の人達だけで霧の旅会という集まりを創立、木暮、武田、両先生を名誉会員にいただいて山を歩き廻りましたが、或る霧の旅のメンバーからカモという渾名をつけられてしまいました。多分藪山を多く歩いていたら鴨といわれたのかも知れません。

武田先生で面白いのは、その後漸くスキーが一般に普及されてきたのですけれども、先生はスキー

などはアメンボーおどりだなど云われて笑われ、私共にもすめられなかったのに、何時の間にか御自分だけは練習されて、後で先生に苦情をいったものでした。もっとも、当時スキーをやる閑や金がある位なら、その間に山へ行くなど云いあった位で、私はとうとうスキーをやる機会がなしに終わってしまいました。結局少しでも余裕ができれば、霧の旅会の仲間と一緒に近郊の山々を歩き廻ったものです。その頃仲間の河田楨、高畑棟材氏などは口八丁手八丁で、山を歩くと共によく本を出されたのですが、私共は書く閑があれば歩けという主義で大菩薩連嶺廻りによく足を向けたものでした。

一時私は年五十回の山行を念願したのですが、どうしてもそれができず四十九回が年間山行回数の最高でした。もっともこれは私の結婚後の話です。

色々面白い話が多く、或る会員などは山の中で出会っただけで意気投合してしまい、とうとう女房まで世話する迄になったものもありました。その頃の中央線は飯田町始発になっておりまして、電灯の代りに小田原提灯を使ったものですが、或る時などは私共が並んで夜道を通るのを見た駅前の茶店の婆さんが、帰途そこへ着いてみると、ゆうべは狐火を見たに信じて疑わぬ話を聞かされて大笑いしあ

第四日 晴 講義後解散

最近のヒマラヤ事情

深田久弥氏

一九六四年にヒマラヤに入った各国隊の詳細な説明と、六五年隊の計画の発表後、

①各隊間の横の連絡が少ない。どの様な機関を設けたら良いのだろうか。

②ヒマラヤ・フアウンデーションと云った機関が外国には必ずあるが、日本では之だけ出掛けて行くのにその必要性を感じないのか。

の提案があり活発な議論が行われた。日高前会長の海外登山審議会を全て通ずるよう日本山岳協会を一本化して、外貨の世話をするよう決めるべきとの意見を中心

に、参加者全員、国内の整理を要望する気持が強く伺われた。

一、松方会長の閉会の辞 全国の海外経験者が一堂に集まり夜を徹して話し合う機会を持つた事は、非常に有意義であり且、楽しい会であった。今後は是非集まれる機会を造ることに努力するという言葉で閉会となり、十一時、バスで一同福島駅に出て解散した。

地元福島支部長、伊藤弥十郎氏以下支部各位の御協力と宿舎相模屋の主人である会員相模八郎さんの深い御親切に紙上を借りて厚く御礼申し上げます。（宣下記）

（七頁下段へ）

った思い出もあります。

歩き方も、両夜行日帰りとか、山で夜通し歩き続け、日中も加えて二十六時間ぶつづけに歩くような、相当な強行軍をしたものですが、その点、交通機関に恵まれた今の人達は大変倅せだと思えます。こんな山行の時でも、事前の調べに「山岳」を読みあさったり、武田、木暮先生などに教えていただきに伺ったり、又、帰って来てからも必ず報告に行ったものでした。

山岳会の虎ノ門時代、一時会報のお手伝いをしたことがあります、会社の私の机は会報の原稿で一杯で、支配人からよく睨まれたものでした。

塚本閑治さんの山岳映画などができると、私共が宣伝して廻って山登りをPRするのに奔走したのですが、今日ではその葉が利き過ぎて登山人口過剰になってしまいい、余計なことをしたと思つています。

霧の旅会の創立は一九一九年でしたが、私は後から入会致しました。この頃は思い切った縦走などなかなかできず、大正八年道志から松田へ抜けた丹沢山縦走が縦走登山の初めだったと思います。又、上越国境山脈の縦走も大正十五年夏霧の旅会が初めてで、角田氏のそれより大分前だったように思います。

私は大変筆不精で記録はまるで

取りませんでした。田部、木暮

両先生は山行のたびに丁寧に記録を取り、素晴らしい紀行文を残されたのは敬服のほかにありません。特に木暮先生はヒマラヤ研究に多くの努力をされ、今日のヒマラヤ遠征の土台を作られたので、お亡くなり後のその資料などをリヤカー一杯に積み切れず、二回に運んだ位だったので、惜しいことに虎ノ門のルームで戦災で焼いてしまに残念でなりません。何とかして木暮先生が一生をかけた大量の記録文献を木暮文庫として復活したいものです。

北アルプスには小屋など一つもなく、上高地にも五千尺と清水屋しかなかった当時は、泊りにも這松に油紙を張る程度で、登山用具の点などから云えば実にみじめな質素きまるものですが、そのようながむしらの山登りでありながら、当時の感激はまだまだ実にはつきりと頭に残っております。

私は、心中ではまだまだ山を楽しんで登りたいと思いますが、もう年老いてしまいました。しかし今でも山岳会員になったという誇りを持ち、一生のうち山岳会へでるだけの御奉公をしたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。

(本稿は五月十九日、東京支部三水会での講演要旨をまとめたものです。)

(文責・松永敏郎)

◇ウエストン祭◇

日高信六郎



中村清太郎画

今年の第十九回ウエストン祭は一昨年と同じく快晴にめぐまれて終始した。五日(土)早朝島々から徳本峠を越えて上高地に入った七十余名を加えて、二百人を超える会衆が、翌朝十時梓川辺の碑前に立ち並んだ。その中には渡辺副会長、藤木顧問夫妻、石原東京支部長、牧野静岡支部長、尾崎喜八夫妻、中河与一夫妻、深田久弥、加藤泰安等諸氏の顔が見えた。

エーデルワイス会員諸姉の合唱について、新しく取りかえられたレリーフの羅布が土地の二少女の手によっておろされ、経三尺におよぶ丸型の板碑はかがやかしい朝の陽をうけて、彫りの深いウエストン師の温顔をクッキリと浮び上らせた。藤木・日高の二長老会員が花を捧げ、高山信濃支部長と安曇村々長の挨拶につづいて、渡辺副会長の挨拶と、レリーフ製作者佐藤久一朗会員の新板碑製作について謙虚な話があり、尾崎喜八氏

は爽やかなその朝の感興をそのままに歌い上げた、書きおろしの詩を朗々と誦して、人々に深い感銘を与えた。

午後の講演会は大梨平のロッジで開かれた。横内斉氏は上高地の植物について語り、その代表的なものとして道松と化粧柳を説明し、渡辺副会長は松本駅長と横内氏の問答をひいて、登山者のモラルと自然保護を論じ、日高評議員は山に登る態度と心構えについて感想を述べ、尾崎詩人は山と登山者について語ると共に、木管の縦笛を取り出して、エリザベス一世女皇朝の教曲を吹奏し、講堂を魅了した。この催しが十九の回を重ねて、年ごとに盛んになり行くことを喜び、信濃支部のかたがたの絶えざる熱意とお骨折りに敬意と感謝を送り度い。

インド隊(一九六五年) エベレスト成功の一因

在インド

谷種臨時代理大使

(日本山岳会のエベレスト登山について) 一般インド山岳財団(Indian Mountaineering Foundation)のH.C. Sarin 副会長と面談しました際に、本官よりインド・エベレスト登山隊の成功を祝いましたところ、同副会長は、一般のインド登山隊の成功はニュー・デリーと登山隊との無線連絡施設

参加者氏名(敬称略・順不同)
現地責任者、松方、実行委員長辰沼、実行委員村木、松田、川上、宮下、芳野、木村、運営委員山崎、地元協力者伊藤(弥)、古市、白石、吉野、武藤、中島、安藤、二階堂、河上

参加者、安間、伊藤(尤)、伊藤(久)、伊藤(文)、岩坪、遠藤、折井、大倉、大野、大森、川崎、片山(博)、金井、君島、清原、栗林、古原、向後、笹川、鈴木、住吉、千田、田代、中馬、津田、新妻、仁科、林、日高、樋口、平井、平林、広谷(光)、深田、堀田、村田、三方、向、八木、薬師、吉沢、脇坂、伊藤(寿)、大田、片山(照)、佐々木、舟橋、酒井、以上、六六名。

× × ×

に依るところが大きい旨語りました。即ちニュー・デリー、カトマンズ間に無線回線を設け、同地よりBC及び六つの前進キャンプを結び、登山隊より刻々気象状況を報告、デリーではそれをもとに気象予報を行い指示を与えた由です。同副会長は、日本がエベレスト登山隊を派遣する際には、ニュー・デリー及びカトマンズ間の無線回線開設につき、全般的協力を行ないたい旨申出ましたので、ご参考までにお伝えいたします。
松方会長宛 (四〇・六・二)

グラウリギーII峰

一九六五年

沖 允 人

六十六日のキャラバンもやっとムクトガオンで終りとなり、直ぐ次の日、CⅠの選定に私、平松、大沢隊員、シエルパ三名で向い、その日のうちに決定し、BⅢに帰って来ました。

次の日、村のポーター二十二名を使い、CⅠまで約七〇〇kgの荷物を揚げ、翌日はシエルパ、隊員の全部はBⅢを出発し、上記の六名はCⅡに入った訳です。

CⅠ、Ⅱ間は一つの氷の瀑があつて、困難の連続でした。約五〇〇mの固定綱を使いました。固定をした後は、約二時間でCⅠ→Ⅱ間は歩くことが出来ます。

次の日、CⅢの偵察に六名で出発しました。ここはチョルテン尾根の乗越があつて、DⅡ峰のキーポイントといったところなのです。上部の急峻なところで工作を交代し、その日チョルテンの乗越の見通しをつけ、約三〇〇mの固定綱をしました。チョルテンのCⅢ側は60〜70度の氷のルンゼで非常に悪いのです。

会 員 通 信

次の日(五月九日)、六名はCⅢに入りまし
た。グラウリギー・ヒ
マールから出た氷河の
末端に近いモレーンの

丘の上で氷河湖があり、気分のいいところ。あたりは七〇〇m級の未踏の山ばかりでゾクゾクするほど嬉しくなりました。十四日間でDⅡ峰を終わろうと全員張り切ったものでした。

ところが次の日、CⅣ点を偵察に行ったパーティのうちジャマン・テンジンが、途中で三〇〇mスリップし、腰骨と足の骨を折って重体になってしまったのです。CⅡにいたドクターを大至急呼ぶのに、夜の九時頃までかかりました。結果は一日も早くボカラカトマンズの病院につれていく必要があるという悲しい診断でした。DⅡ峰は終わったのです。

今一番大切なことは、この困難なルートを如何にして病人を下ろすか、ということに全力をあげることに外に、われわれのなすべきことではないということです。

ジャマン・テンジンをBⅢから送り出して置いて、再び登山を始めたという計画をたてるのは、余りにも日数がなくなってしまうので来ているのです。毎日午後になると、定期的な雪がやってきます。やがて本格的なモンスーンになると思われます。オール・インディアの放送も、上部は毎日雪

で、風が強いといっています。BⅢに着くのが余りにも遅すぎたのです。計画のミスもあったようです。反省はゆっくり行おうとして、今は唯、全員無事で日本に到着することに全精力をあげるべきでしょう。そして加えて、次のDⅡ峰の登山隊のために出来るだけのアドバイスが出来よう、資料の集積、報告を心がけるべきだと思っています。

日本のわれわれをサポートして下さった全ての人々に対しては全く申し訳ない気持ちです。又、全隊員もDⅡ峰へ登りたい気持ちは充分あり、もしジャマン・テンジンの事故がなければ、おそらく成功していたと思われまふ。

全隊員の気持ちを考えると、たまらない気持ちです。五月二十四日頃本隊はBⅢを出発し、六月中旬にカトマンズに着く予定です。皆様によりしくお伝え下さい。

五月十四日・CⅢにて
深田久弥様

札幌来訪の松方さん

高 沢 光 雄

山岳画文集「雪原の足あと」が若深堂より出版された。これは著者坂本直行氏が十勝原野での開拓生活三十余年に訣別し、画家として出発する記念すべき本である。開拓の苦難にあえぎ借金で雪ダルマと戦っているとき、直行氏の絵を東京で売り捌いて、乳牛の購

入費に充ててくれたのも松方さんで、今回の出版にあたってもすでに応援団長として札幌に乘込んで来られ、出版記念会の立役者として終日多忙な日々を送られた。

五月十五日午後二時、全日空で来訪されたのは松方三郎、林和夫、山下一夫、坂本矩祥の四氏で、早速札幌の書店で開催中の「雪原の足あと」の原画展をご覧になり、その日の夕刻、北大山の会の人達と夕食を共にせられた。

明けて十六日、快晴、林氏の提案で早朝より車を走らせ、藻岩山ドライブウェイを登り、定山溪奥の天狗岳の麓へ行って未だ雪深い山相を眺め、札幌に戻ってからは手稲山麓の直行氏の新居予定地を尋ねられた。

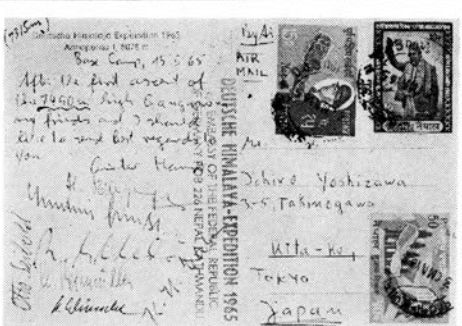
出版記念「山の講演と映画の会」は、午後一時三十分より北海道新聞社ホールで開催され、林氏の司会で始まり、松方さんは「山と絵」と題して一時間わたり講演され、続いて北大アラスカ氷河調査隊の記録映画「氷河」などを上映し、盛会のうちに四時終了。

引続いて松方、直行両氏はテレビ出演のためスタジオを訪れ、五時から出版祝賀パーティをサッポロビル直営ホールで有志四十八名が集り、朝比奈英三氏のユーモラスな司会で楽しい一時を持った。途中で先刻ビデオテープに録画した対談が、テレビタ刊の番組で放送され、本人を前にして喝采

を浴びる。松方さんは思ったよりスマートでなくて安心したと札幌ッ子に大モテ。和気あいあいのうちに唄や踊りまで飛び出し、時の経つのも忘れ賑やかな会であった十六日、松方さんはあわただしかった札幌での所用を済ませ、正午に札幌を発たれ、林氏も追う様に四時離れされた。山下、坂本(矩)両氏は「雪原の足あと」の文中にある然別湖を訪れて帰られたが、雨天に見舞われたともっぱらの噂である。(四〇・五・二〇)

Günter Hauser
からの便

Ganga Purna 其の他に初登したハウザー君からの葉書、BⅢ記、署名してある隊員の名前は次の通り
Ludwig Greissl, Karl-Heinz Ehlers, Klaus Eckerlein, Hermann Kollensperger, Erich Reismüller, Otto Seibold, Herbert Wünsche.



会 員 通 信

マカール登山 許可の交渉 から帰って

II 石原 国利

東海支部のマカール登山許可交渉のために、三月十二日から五月二十日までの約七十日間カトマンズに滞在しました。すっかりネパールペースに同化されてしまい、帰国してからの毎日の忙しい生活には正直なところ音をあげています。

私にとっては五年振りの訪ネでしたが、五ヶ年の歳月はカトマンズをすっかり新しくしてしまつたと強く感じました。まず目についたのは街を走る車の数が夥しく多くなったということです。インドとの道路の開通がそうさせたのでしょうか。いまにも壊れそうな鈴なりのバスにかわって、ベンツの大型バスが颯爽と市内を循環しています。カカニ峠をこえてトリスリバザールまでトラックが往來し、それに沿って高圧線の鉄柱が並んでいます。

いまにも消えそうだったローソク送電もなくなり、街の電灯も明るくなりました。一夜カカニの丘から眺めたカトマンズの街は、もはや近代都市の灯の海でした。中でもキングスロードを貫く螢光灯の光は五年前には夢想だにしなかったカトマンズの夜景でした。そ

の晩折しも、人工衛星がゆっくりと天空を横切って行きました。ネパールはもう辺境でなくなった！ヒマラヤの自然保護について議論する日が近い将来に来るかも知れません。

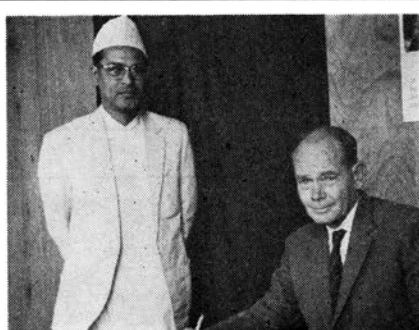
さて、肝腎の登山許可交渉の方は、遅々として捗りませんでした。最初、ネパール外務省の担当官リマール氏(B.P. RIMAL、近く北京へ転任の予定、後任は決まっていなかった)は、「ネパール政府はすでに、どの遠征隊にも新しく登山許可を与えないことを決定している。だからマカール登山についても許可は非常にむづかしい。しかし、あなたたちの隊には四人の医師が同行するという点で、保健省(Ministry of Health)の推薦が得られれば、許可のための可能な道が拓けるかも知れない」というやや弾力を含ませた返事でした。

保健省では、私達の計画が I. B. P. (International Biological Program 国際生物学事業計画)の一環としての研究活動であることに注目し、外務省にあてて「許可を与えることを要望する」と強く推薦してくれました。しかし、遅々たる交渉の結果得た外務省からの返事は「否」でした。それは、「ネパール政府はすでに、『いかなる国からの登山隊、いかなる山に対しても、新しい許可を与えない』ことを決めており、い

まこの隊にだけ特例を認めるわけにはいかない」ということの再確認でした。

しかし、リマール氏は、保健省と外務省の他課の役人立会いの席で次のことをはっきりと約束してくれました。「ネパール政府は近い将来に登山許可を再開することを考えており、再開の折には必ずマカール隊に最初に許可を与える。これを以って私は交渉に終

止符をうつことにしたのでした。さて、問題の登山禁止令に関して、その理由をネパール政府は「独自の理由による」という以外には一切表明しませんでした。真意については不明です。交渉の初期



ネパール外務省にて (1965年4月)
左:リマール氏(?), 右:ロバーツ氏

にすすめてくれるものがいたりして、その解釈にかなりの混乱を招きました。

一方、今回の禁止令はネパール国内では大変不評でした。殊にシエルパは大反対で、ソロクンブ出身の代議士が国会で「生活権の侵害である」と抗議を発し、これに対して首相が「一時的な措置である」と答えています。

いつ再開するかについても、ネパール政府は公的には一切表明していません。ただ、政府筋に知人もつといういわゆる消息筋の情報では、一九六七年再開説が最も多いようでした。私達としては再開の一日も早からんことをただ望むのみです。

いま、ネパール外務省の登山台帳にブックキングしてある登山隊は、日本からの隊としてはマカールとエベレストの二隊だけだとリマール氏は言っていました。

「再びローツェシャル」みたいなことをしないでは」と強く申し入れをしましたが、リマール氏ははっきりと「決してそんなことはしない」と答えました。おわりに、一般の支部

長会議の折に紹介しました「ネパール山岳会」について記します。

ネパール山岳会のこと

かねてより、毎年日本から数隊

もの登山隊がネパールに出入りしていますが、各々の登山隊がその都度装備を新調して持込み、使える余地のあるものを持帰っていることには実に無駄があると思ってい

ましたので、カトマンズに日本隊の装備を保管して相互利用の便宜をはかってくれるところがないものかと、ネパールの知人に相談しました。すると彼は、「ネパールではかねてより、毎年かくも外国からの登山隊が来国していな

ら、肝腎のネパール国民の間に登山が普及していないのは寂しいことだと感じている。ネパールに登山が普及しない原因は、一つに登山装備の調達が困難であること、二つに適当な指導者がいないことにある。あなたたちの希望と私達の希望を容れて、ネパールに山岳会を創つたらどうか」とい

い、「新しく出来る山岳会の会長としてふさわしい、ネパールスポーツ協会々長スシル・シャムシェル氏(Sushil Shamsheer J.B. Rana)に相談してみよう」とい

うことになり、「日ネ山岳会」案なるものを二人で作成して氏のところへ持込みました。氏は、「山岳会を創る趣旨には賛成である。しかし『日ネ山岳会』ということになるとネパールは日本にだけ便宜を与えているという印象を与え

やすい。実際には日ネ山岳会というものになるにしても、型としてはインターナショナルなもののが

ぞましい」ということで、結局、名称を「ネパール山岳会」(Nepal Mountaineering Club)とし、希望する各国に支部(Branch)をおくということになり、別記のような規約が出来ました。東海支部は早速入会手続をとり、この会が軌道に乗るまで日本支部の責任者としての任に就くことになりました。将来日本からのネパール向け登山隊の相互連絡が統合されるようなしめるべき機関が出来たら、あとはそこにこの会の日本支部の運営もお任せしたいと考えています。大方のご協力をお願いする次第です。

ネパール山岳会の本部役員には次の人の就任が決定しています。

President : Sushil Shamsheer

J. B. Rana

Vice-President : Gajendra Bh

adur Singh

Secretary : Narendra B. Barua

日本支部の役員としては、先日の昭和四十年東海支部総会にて次の三人が決定しました。近くネパールの本部へて通知する手筈になっています。

支部長・石原国利

副支部長・原 真

事務局長・中世古隆司

追記

ネパール山岳会(Nepal Mountaineering Club)の名称について、松田雄一氏より、数年前カトマンズに同名の山岳会があったと

のことで、混乱がおきほしくないかとのご指摘があった。前にあった会は現在あるヒマラヤ・ソサエティの前身と思われ、ヒマラヤンソサエティの発足と同時に解消したものと考えられる。事実私がカトマンズで聞いた限りでは、ネパールには現在、ネパール人による山岳会はないというところであった。しかし、前に同一名称の山岳会があったことに気付かなかったのは全くの不明であった。早速ネパール本部に連絡をとって、適切な措置をとってもらうことにしたい。

(以上)

アイガー北壁日本隊覚え書 —1965—

隊 名	人員	隊 長	隊 員
1 全 岳 連 隊	6	中野 満(40)	石田嘉一(35), 秋山正人(32) 加藤幸彦(32), 安久一成(27) 茂野徹太郎(31)
2 日本登山学校隊	4	松島利夫(25)	林与四郎(26), 遠藤竜行(23) 飯田博子(22)
3 高 嶺 山 岳 会	2	大谷計介(23)	橋本義男(24)
4 全 日 本 隊	7	吉尾 弘(28)	星川政範(31), 湯浅道男(28) 石川富康(28), 稲垣公平(25) 加藤竜男(21), 佐々木徹(25)
5 服 部 隊	2	服部満彦(33)	渡辺恒明(?)
6 大 倉 隊	2	大倉大八(31)	長久 実(27), 船木 享(32)
7 高 田 隊	1	高田光政(?)	船木 匡(29)

アイガー北壁七隊も
一九六五年の夏はヒマラヤ方面での締出しの影響もあってか、左掲のように日本からもアイガー北壁を目指す隊が七隊も犠牲者〇

出た。わかれは初めは少危険が、その中の一隊から早くも犠牲者が出てしまった。第二隊の林君と飯田嬢が、訓練のために登ったブレティエールからの下山中、雪崩にやられた(六月三十日)とい

いのである。日本人達にはお気の毒であるが、これ以上予感が当らないようにして欲しい。(吉沢)

旧聞に属するが一九五八年に、チェコ(隊員・V. J. Vujta, V. Smida, D. Forejtnik, M. Jilek)とソ連の登山家が、ポビエダ峰(七四三九m)の東稜上五KMにある七〇五〇mの峰に初登頂して、これをキルギス語で「友情」の意味の Psk Dostuk と命名した。新しい七〇〇〇m級の出現である(吉沢)

▶編者注◀この規約の原文には多少文字のミスプリントらしいものがあつたのでそれは直したが、それ以外は原文通りである。

The Nepal Mountaineering Club

—May 1965—

Outline of the Constitution :

1. It shall be named as "The Nepal Mountaineering Club".
2. The aim of this Club shall be mountaineering and it shall seek to promote mountaineering spirit among the people of Nepal and the world.
It also aims to drive friendship, cooperation and sportsmanship among the people of Nepal and the world.
3. The head office of this Club shall be located in Kathmandu. There shall be a branch office of this Club in each member country.
4. Membership can be obtained on the recommendation of the president or the branch president of the Club.
5. Entry fees shall be one hundred in Nepalese currency or any mountaineering equipments equivalent to this amount.
Yearly subscription shall be Rs. 25/- N.C. only.
The above mentioned subscription and entry fees are for foreigners only.
6. The entry fees and yearly subscription for the local people (Nepalese) shall be Rs. 15/- and 25/- respectively.
7. Any member can borrow mountaineering equipments for mountaineering purpose only according to the rules and regulations of the Club.
8. The host Club may propose to all the expedition parties of the member countries to include some of the members of this Club in their teams. The reason behind it is being to train the young people of Nepal about mountaineering.
9. The following shall be officers of the Club.

1. President. 2. Vice-president. 3. Secretary.

Rules and Regulations for borrowing the equipments of the Club.

- a) Any member can borrow mountaineering equipments for mountaineering purpose only with the permission of the President, Vice president and the Secretary.
- b) Party or persons borrowing the equipments must pay one percent of the total cost of the borrowed equipments per day. But the party or persons who donated the equipments shall be exempted from payment.
- c) In case of any damage, same percentage would be charged according to the damaged and in case of complete or heavy loss, he shall be liable to pay the total costs of the equipments.
- d) Any mountaineering party can leave their goods in the custody of the Club. But the Club will not be responsible for the damage caused by any natural calamities like fire and earthquake and insect etc. However the mountaineering equipments shall be preserved in a safe and selected place.
- e) Donation of mountaineering equipments from any member of member countries will be highly appreciated.

会 員 通 信

III

パキスタン便り

中 村 保

去年の秋以来、四回目の来パで、少々パキスタンずいている昨今です。東京の山関係の動静は倉知君より、いろいろ連絡を受けておりますが、ネパールと云い、今回のパキスタンの登山許可中止と云い、日本の登山界にとってショックな事と思います。当地で感じますことは、例のカシミール問題は、我々の想像の及ばぬくらいシリアスな事で、最近北の方を旅行した人の話では、軍隊が国境付近に続々と集結しているそうです。小生三月に仕事の暇をみてギルギットまでいき Karakorum の Gurus をみて、そのスケールにどぎもを抜かれました。やはりヒマラヤだと思いました。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

(カラチにて五月三十一日付、松田宛)

言語学の研究に

高 島 誠

拝啓、天候不順のこのごろです。が相変らずに健勝のことと思ひます。

さて、このたび私はアメリカ合衆国の招待によりハワイ在東文化センター (INSTITUTE OF

TECHNICAL EXCHANGE 言語部門) に慶応義塾から派遣され留学することになりました。

その後本土に渡り来年八月末帰国の予定です。出発は六月十七日夜になりまして。どうぞ今後ともよろしく指導の程をお願い申し上げます。

右略儀ながらご挨拶申し上げます。

(留守宅)

東京都北多摩郡狛江町

猪方一〇四七

再びネパールより帰国

風見武秀

梅雨も近いようですが益々御清祥のことと存じます。

私こと昨年九月下旬に再度念願のネパール・ヒマラヤ撮影旅行に出掛け五月二十八日帰国致しました。早いもので丁度8ヶ月になりました。ネパール・ヒマラヤでは毎日登りて抜けるような秋晴れの雪山と、厳冬の鋭い氷峰と雪煙の山々、そして厳しい風土の中で生活するチベット系の人々の記録。冬が去ると高い峠にも花が咲き、のどかなヒマラヤの風景と季節を追って歩いて来ました。

雪山が終ると、タライのジャングルに虎狩りと欲張ったのですが、暑い夏は虎も出るのは夜だけだそうで撮影失敗。

帰途はインド国内に入って、カシミール地方を廻り、カラコル

ム、ヒマールを望んで再び感激。お蔭様で益々黒くなりましたが至極元氣です。

どうぞ今後共よろしくお願い致します。

昭和四十年六月

神奈川県川崎市生田四四三五

電話〇四四(91)二五八一番

事務所(363)三六八一

内線 四五

ネパールより帰国

神 原 達

拝啓 初夏の爽やかな季節となり皆様には益々御活躍のことと存じ上げます。

さて私、三ヶ年に亘る外務省からのネパール王国の調査研究の仕事を終え、この三月家族とともに無事日本に帰りました。学生時代を含め通算四ヶ年のネパール王国滞在中、かなり資料も集まりましたので、目下外務省への報告書まとめとともに、ネパール王国の全般的な紹介を一冊の書として上梓したく準備中です。

昨年八月にはバンコクにてビルス性肝炎にかかり皆様に御心配をおかけ致しましたが、幸い病氣もすっかり回復致しましたので御休心下さい。妻も日本の生活に少しづつ慣れて参りまして、また長女も一才八ヶ月になり、家族とも元氣であります。

では日頃の御無音をおわびし、遅ればせながら帰国の御挨拶を申し上げます。

一九六五年六月十日

東京都大田区田園調布五の七

電話(七二一)三〇四三番

ローガン峰へ

防衛大山岳會

謹啓 向暑の候、益々御清祥のこととおよろこび申し上げます。

さて、防衛大学校山岳会の「ローガン峰登山隊」は皆さまの絶大なるご支援のおかげで準備相とのい、六月一日には先発の田中、高見、六月十日には若浦ら四名、六月十五日には川上ら四名が、それぞれ東京国際空港よりANA機で出発することになりました。六月十六日アンカレッジを発ってローガン氷河に入り、七月下旬ごろ、ローガン峰(六〇五〇米)の登頂を期しております。

出発に際しまして登山隊にたまたわりましてご厚情に心から感謝いたします。

昭和四十年五月二十五日

防衛大学校山岳部

部 長 朝井一男

顧問代表 皆川孝平

ローガン峰登山隊

隊長 川上 隆

隊員 若浦義弘

田中 甫

弘中 一寿

大須賀 治

志賀 伝

高見 巖

長田正行

田代儀雄

小林 弘(医官)

マッキンレー峰へ

大阪全岳連隊

一九六四年にセント・エライヤス峰へ行った浅野清彦氏からの便りによると、本隊の二名は六月十七日、羽田発のノース・ウェスト八便で出発、昨年の隊員一名(西前氏)はアンカレッジ在住で、その住人 Arthur Davidson (コロラド大学)とこれに合流する。因みに先発の鑛木、中村の両氏は六月四日に、川崎汽船の昭川丸で横浜から既に出航している。

全日本山岳連盟

アラスカ登山隊

隊長 塚崎義人(35)

副隊長 梶浦正数(29)

隊員 鑛木勝彦(29)

西前四郎(28)

中村久住(23)

ダビッドソン(22)

この隊もマッキンレーの南壁を狙っているが、近頃はこの壁が大部いろいろの隊の目標になっているようだ。塚崎隊は東カルヒトナ氷河上三三〇〇mの地点にBCを建設し、約四週間壁に取組み、余裕があれば頂上に設営して北峰にも登るという。

七月三十一日、アンカレッジ集結の後、八月一日―三日に帰国の予定になっている。ご成功を祈る。(吉沢)

海 外 情 報

ヒンズークシユ情報

このたびはアフガニスタン真崎大使より届いた情報によると、今年ワハン地区に入山を申請した隊は、すべて登山を拒否された模様である。即ち

「このたび、アフガニスタン外務省から、日本大使館の係官、笹島二等書記官に対し、ワハン地区に入ることとは許されないと申し越し、List of the Alpine Clubs having been refused access to Wakhan Mountains」というリストが届いた。これによると、次の諸クラブがワハン地区における登山を拒否されている。

1. Austrian Alpinist Union
2. Italian Alpine Club
3. American Alpine Club
4. Czechoslovak Alpinists
5. Scottish Hindukush Expedition
6. Edelweiss Club
7. Tokyo College of Pharmacy (松田)

大分・ヒンズー・クシユ隊
ヌリスタン山群へ出発

かねてより大分ヒマラヤ研究会(代表・加数敦功)と日本山岳会(大分支部(支部長・野口秋人)は、ヒマラヤ登山の準備を進めていたが、この度アフガニスタン国より

正式の登山許可を入手、大分合同新聞の後援を得、先発隊は六月一日羽田発でカブールに向った。

目標の山はコー・イ・モンディとミール・サミール(前号一覽表参照)、隊長、矢野真(40)、副隊長、西諒(32)、梅本秀徳(31)、姫野和記(24)、加藤英彦(23)、江藤幸夫(21)の六名。

登山期間は六月中旬から七月中旬の予定で、五〇〇キロ前後の荷物、装備は軽量近代化し、食糧は高地食を除いて大部分現地食で賄う予定。

この地帯ではドイツ隊が屢々活動して高い未踏峰はないが、日本人では一隊を除いてまだ入っていないので、その成果を期待する。

尚、この隊が出発するまで、地元大分でゴタゴタがあったと噂で聞いていたが、去る五月二十九日の支部長会議の席上、野口支部長よりその顛末が報告され、県知事、県体協会長などの仲裁により、岳連と大分ヒマラヤ委員会の紛争は、円満に解消された旨説明があった。(大塚)

ヒマラヤン・ニュース

インドのヒマラヤ熱はエベレストの九日間に四隊、九名登頂という輝やかしい登頂新記録で、いやが上にも上っているが、登頂のニュースがのっている The Statesman の五月二十二日号には、別

の二つの登山隊のニュースがでている。

一、デューナキリー
デリーにある St. Stephen's College Hiking Club で組織された十一名の登山隊は、五月中旬にガルワルの Dhumagiri (7066 m) を試みたが、同隊の隊長代理である Romesh D. Bhattachari からデリーに達した報告によると登頂は断念した模様。

二、ガネッシュ・バルバット
ラクノー発のニュースによると七人よりなる U.P. Police 登山隊が Ganesh Parbat (21,430 ft) 向け五月二十二日出発した模様である。この隊のリーダーは、警察の署長代理である Sheoraj Singh で、彼はガルワル・クマオン地方に精通しており、一九六四年には成功した Panchchuli 登山隊にも参加している。(松田)

英国からのヒマラヤ
登山に対する申請に
つきの注意

Alpine Club の一九六五年一月の circular にネパール、インド、及びパキスタンへの登山隊の登山許可申請についての注意がでていましたので、御参考までにお知らせします。(松田)

Expeditions to Nepal, India
and Pakistan.

Further warnings have been received from the Foreign Office

and the British Mountaineering Council concerning difficulties likely to be encountered by parties visiting these countries in regard to permits and customs, including Customs requirements in India for goods in transit for Nepal. All parties are recommended to consult as appropriate, well in advance, the British Embassy at Katmandu, and the Offices of the High Commissioner for India or for Pakistan in London. Attention is also drawn to the sharp fluctuations, usually upwards, in rates of pay for local porters.

カラコルム登山許可状況

五月十五日、パキスタン政府外務省は、突如として、今夏カラコルムに入山する登山隊の入国をすべて取消す旨発表した。但し京都府岳連のディラン峰登山隊は既に入山しているため例外として認めるというものであった。取消された登山隊の数は十二隊にのぼるといわれ、この中には東大のキンヤン・キッシュン隊、アメリカの K・6 隊、西独・パ合同隊等が含まれていたが、その後東大隊は、現地交渉の結果二十八日再度許可をとることに成功した模様である。この程来年度のディラン・ミールの許可交渉のためにカラチを訪問している千葉岳連の仁科正純氏から深田氏宛届いた私信によると

「東大隊の場合は取消し通知を受けると以前に、すでに荷物と先発隊が日本

を出発していたという事実が、かなり役立った様ですが、今年は、アメリカ隊、西独・パ合同隊も未だに、許可をとったという情報が入っておりません。パキスタンに対する経済援助が米・独・日の順であるということからして、ここで東大隊が許可を取得したということは、特筆に値しましょう。よほど強力に運動したのと思われまます。今度の事件は明らかに印パ間の関係が、緊張状態になったためでありますが、カラチの街にはその様な様子は全然感じられません。しかし乍ら当地の新聞には、連日その関係記事が載っており、インド軍が国境地帯に集結したとか、カシミールの非武装地帯で、インド空軍が現地人に発砲し、数人の死者を出したとか、また六月二日付の新聞には、一面に大きくアユブカーン大統領の「戦争はのぞまぬが攻撃を受けたら断固戦うであろう。しかし乍ら戦争は避けるべきで、英国の仲介を希望する」という声明が掲載されており、今後この問題がどのように発展するのか、現在のところ全く見通しがつかず、従って来年度のわれわれの計画もすでに不許可の通知を受けとった現在、ほぼ絶望的であるといつても過言ではないかと思ひます。もともと状況が何時どのように変化するかわかりませんが、我々は常に体制を整えておかなければならないと思ひます。

東北ネパール地図頒布

山岳59年付録の右地図を送料とも一〇〇円で同好者に頒布しますから、ご希望の方は外苑コーポ内の当会事務所にお申込み下さい。



一九六五年度・東京支部総会

一、日時 昭和四〇年四月二四日午後二時より

二、場所 本会本会館

三、次第 司会・関口

四、支部長挨拶 石原憲治

五、六十周年につき本部の催しに對し応援したい

六、小集会・懇親会等地方支部との交歓を推進したい

七、支部としての懇親山行を実現したい

八、支部員数約八五〇名、会の約四〇%のメンバーを擁する東京支部として活発に活動したい

九、一九六四年度の事業報告

一〇、沼倉寛二郎

一一、集会の開催

一二、三月十五日農大 トウインズ

一三、五月二十日京大 西イリアン学術調査隊スカルノ峯

一四、六月十七日ビールパーティー(一五〇名参加)

一五、八月十九日新入会者披露パーティー(一三三四名参加)

一六、九月十六日大阪市大 ランタンリル

一七、十月二十一日学習院大 ローガン峰

一八、十一月十八日山の気象

一九、十二月十六日クリスマスパーティー(四八名参加)

二〇、四月二十七日岳連 アルパター・ギヤチンカン

二一、三月十七日都立大 東ネパール横断

二二、五月中旬於穂高岳岳沢

二三、スキースクール

二四、一月於山田温泉

二五、一九六四年度決算報告

二六、沼倉寛二郎

二七、同監査報告 安彦 六郎

以上異議なく承認
一、一九六五年度予算案付議 沼倉寛二郎

渉外費削減につき質問あり、使用実績がない為予備費中に入れたとの答弁あり、承認可決

二、役員改選の件

支部長 石原 憲治(再任)

委員 沼倉寛二郎

西丸 震哉

芳野 起夫

山口 節子

鈴木 郭之

小野 利次

野萩 周也

関口 周也

富田美知子

君島 久登

片桐理一郎

小味 秀純

倉知 敏郎

松本 敏郎(新任)

広谷光一郎

鈴木 和信

村井田 博

中川 武

折井 健一(再任)

安彦 六郎

監事 折井 健一(再任)

上記推薦に對し異議なく承認可決(以上)

支部長会議報告

△期日 五月二十九日(土)午後二時

△場所 本会本会館

△出席者

△出席者

△出席者

△出席者

田、飯野、辰沼、川崎、田村各理事。神谷、青木、藤井、村井各評議員。

△議事報告

(一) 会長挨拶

本年度の方針を説明、特に山岳協会に對し、本会としてのぞむ態度について説明。尚本年度は本部と支部の關係を密にするということで渡辺副会長、深田理事が支部、会員担当理事となつたので御協力願ひたい旨挨拶あり。

(二) 本年度役員業務分担につき説明

(三) 本年度理事會と對する具體的運営方針につき説明

尚 昨年度は本部と支部との間で事務上の不備のため二問題があつた。そこで本年度は支部規定を明確にした。山岳協会支部は個々の会員が作つてゐるクラブの支部であり連盟ではないのだから、この点誤解のない様に願ひたい。会費の納入については、方法を検討し、納入し易い様に改め、復活制度の取扱いも明確にしていきたい。

(四) 各支部報告

出席の各支部長及び委員より支部の現況、行事予定等につき説明あり、各支部の立場より希望が述べられた。岳連尾関会長からの提案については、各支部の積上げ方式には賛成であつても、運営と人間の問題に難点があり、本会としては積極的な努力すべきであるとの意見が強く、特に各支部共通の意見として、協会の役員は重任であるという意見が強調された。

最後に松方会長より、協会の問題、各県単位の積み上げ方式には賛成であるが、何れもがスムーズに顧問団体になる必要はないのであつて、むしろ積極的な協会の一員として協力する必要があるとの説明あり、明日の協会役員総会にはこの方針でのぞむことにする。

尚最後に支部費の問題、支部員の資格等につき質疑応答あり、午後六時閉会した。

日本山岳協会役員総会報告

△期日 五月三十日(日)十時

△場所 日本山岳協会事務所

△出席者 松方、尾関副会長、事務理事 加藤、高橋(定)

常務理事 辰沼、大塚、松田、高橋

(昭、藤、鎌田)

理事 深田、小島、星野、羽賀、山本、高山、水野、鈴木

監事 植木、以上十九名

△議長選出(議長 小島六郎)

△議案

一、昭和三十九年度事業報告 高橋

二、昭和三十九年度決算報告 鎌田

三、昭和四十年事業計画 高橋

四、昭和四十年事業計画 高橋

五、規約一部改正の件

六、常務理事の増員案が出されたが、A側より、その必要はない。むしろ専従の事務員をおいた方がよいとの意見が出た。本件も常務理事会一任とする。

七、連関対策委員会規定の事後承認の件、鎌田常務理事より提案あり、承認し、委員の増員、規定の検討等は常務理事会一任とする。

八、七、協会会長推薦の件につき緊急提案がなされ、後任会長は六月末迄に、副会長を含めた常務理事会で決定することとする。尚新会長決定迄の期間はとらえず、武田前会長に留任を依頼する。

八、その他

海外登山審議委員会規定を承認。

五月三十日より施行することにする。

案について討議

日本山岳協会より提案された「現在の協会組織を変更し各都道府県団体協加盟団体(山岳連盟又は山岳協会)が構成団体となり、日本山岳協会は顧問団体となるべし」という提案に對し、松方会長より武田会長に宛てた文書には、「協会の問題は協会の場に於て討議されるべきものと考えますから、貴連盟の提案もまず、協会の役員会の議題として取り上げるのが適当」との内容発表がなされ、討議に入った。

(松方協会副会長案)

「日本山岳連から出された提案について

スポーツ外貨

登山計画書の提出について

当会所属の諸団体のうち

昭和四十二年四月から

同四十二年三月末の間

に、スポーツ外貨の割当てをうけて、海外登山を行う計画を持ってゐるところは、来る八月二十五日まで登山計画書などを、当会まで提出下さい。同日の消印のものには有効ですが、期日に遅れたものは、一切受理いたしませんから御注意下さい。

お問合せは海外登山係

大塚博美(403)三、一一一

ては、協会のこの場で討議して行きたい。日本山岳連からの提案の主旨は地方に単位をつくらせて積み上げていくことであり、この点については賛成である。中央の機構は地方が選ぶから数は増えるかも知れない。しかし乍ら地方の人は東京に常駐できないから事務局を作る必要である。これに伴う経費の増加は、地方からの積み上げであれば集められると思う。しかし乍らJACは顧問団体となる必要は少しもない。本会に異議なければ規約を書き直す作業に移つてはどうか。尚山岳協会の規約の中に統括団体という言葉があるが、実際は世話係りである。本会につき種々と質疑応答があつた後、全員基本的には、早急に常務理事會を開いて検討しその結論をまつて役員総会を開いて決定することにする。尚本年度の協会役員は次員上段の通りに決定した。

1965~66・日本山岳協会役員

役 務	氏 名	担 当	役 務	氏 名	担 当
副 会 長	尾 関 昌 弘	海外登山	副 会 長	松 方 三 郎	遺難対策
専 務 理 事	高 橋 定 喜	国体	専 務 理 事	加 藤 泰 吉	難民海外登山
常 務 理 事	藤 鎌 田 久 重	国体	常 務 理 事	松 田 博 雄	経 理
理 事	星 野 正 太郎		理 事	深 久 弥 七	
"	大 石 実 治		"	斎 藤 平 吉	
"	鈴 木 林 治		"	三 井 松 男	
"	荒 川 勘 五 郎		"	山 本 朋 三 郎	国 体
"	武 内 重 晴 利		"	高 山 忠 四 朗	
"	松 長 幸 知		"	水 野 祥 太 郎	体 協 評 議 員
"	沢 村 植 木	遺難対策	"	小 島 六 郎 平	
監 事			監 事	藤 井 運 平	

六月度理事・評議員会議事録

(六月三日・ルーム)

▽出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事・加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、田村、住吉、田辺、竹田、宮下、杉浦、川崎、評議員・神谷、藤井、井、入沢、望月、吉沢、東京支部石原支部長、東海支部・中世古委員、静岡支部・牧野支部長、大分支部・加藤(教)、監事・松本、野口、田中、加藤(憲)以上三十一名

(委任) 藤島、青木、折井、川喜田、今西(錦)、津田各評議員、荒巻秋田支部長、石原東海支部長、藤木顧問

▽議事、報告事項、

(1) 復活会制度の件(深田)
昨年迄不明確であったこの件を明確にし、積極的に会費未納により由に浮

いている人を会員として復活する事に努力する事を決めた。イ、旧番号による復活は一回に限る。二回目には会員番号は新しくなる。三、今年度は昭和三十一年以前に会費滞納により失った資格を喪失した人のみを対象とする。ハ、復活会費は三、〇〇〇円とする。従って四二〇〇円(東京近郊在住者は四六〇〇円)を納入することにより復活できる。ニ、昭和三十一年以降に会費未納の者は当該年度の会費を支払うことにより山岳の頒布をうけることができる。

(2) 山岳協会役員総会報告
松方会長(別項参照) 尚小島六郎氏を理事にして追加推薦した件につき事後承認した。

(3) 支部長会議報告
松田(別項参照)

(4) 遺難対策案検討の件(辰沼)
遺難対策委員会は、辰沼、芳野、相沢、徳久を以て構成する。山岳会としては、救援、事後処理迄の手をばすのは困難であるので、対策の中心を所轄官庁の窓口に移す方向に持っている。研究会、啓蒙ということに重点をおきたいが如何かとの説明あり。本件については種々意見があり、次回理事会迄に委員会として具体案をねって提出し再検討することになった。

(5) カトマンズ現地報告 (加藤喜一郎氏)
商用のためカトマンズを訪れたがエ

ベレスト委員会榎委員長からの依頼で外務省を訪ね、登山禁止令に対するネパール政府の見解を正してきた。禁止の表面上の理由は登山隊に対し充分の便宜が与えられぬ為となつてはいるが、その真意は判らない。この禁止はしばらくの間、解除される見通しはないので山岳会から正式に交渉に來ても同じだということであった。

(6) エベレスト委員会報告(松方会長、加藤理事)
加藤(憲)氏の連絡により五月三十一日エベレスト組織委員会を開いて協議した結果、一九六六年度プレモンズ期に隊を派遣する件については、見送ることになった。六月九日のエベレスト委員会に諮った上で正式に決定した日公表したいが、この点了承願いたしとの説明あり、本件承認。

(7) 各担当理事報告

① 指導
学生部加盟六二校を四グループに分けて、グループ別に活動するべく検討中である。(村木)

② 関西
関西支部報告。学生部は関西岳連と連絡をとってすゝめる。(宮下)

③ 会報
六月号二四〇号は目下印刷中、七月号から毎月十日の定期刊行にしたい。尚会報の頒価を五十円に値上げしたいとの提案あり、万場一致値上げを承認した。(深田)

④ 会員係
榎、近藤両名誉会員の叙勲に対する祝賀パーティーを如何するか提案あり、有志により行うことを決める。

⑤ 海外登山 (大塚)
毎月第一月曜日に行う海外登山懇談会は七月からはじめる。第一回はネパールをとり上げる。尚日印婦人合同登山の件はインド側より来春にしたいとの希望ありその線にそって計画中である。(田村)

⑥ 調査研究
今月末に委員会を開き活動を開始したい。(松田)

⑦ 庶務
各委員会の名簿の氏名確認。

⑧ 山岳編集 (望月)
十二月の年次晩餐会に渡せる予定で進行中。

⑨ 自然保護 (杉浦)
現在自然保護委員会ととり上げられてはいるのは次の通り。
イ、甲田(北大洋) ケーブル、富士山静岡側より吉田に抜けるケーブル。
ハ、立山から黒四ダムに抜けるケーブル。
ニ、上高地西穂ケーブル。
(8) 六十周年記念事業 (田辺)
委員会の準備会を日高、望月、神谷、田辺で集まり、相談することになった。藤島評議員からの提案もある。理事会からは早急に具体案を作ること依頼する。尚大分支部の野口支部長より一萬円の寄贈があったが、これは六十周年記念事業費として受理してある旨飯野理事より説明。(松田)

(9) 信濃支部主催長野県果樹縦走計画は都合により中止になった。

② 読売新聞社主催「立山大集会」も都合により中止になった。

③ 越後支部主催「ひなびた佐渡を探る会」計画説明。

④ 明治生命ホール山岳展後援依頼の件、常務理事会に一任。(神谷)

⑤ 本暮報告
霧の旅会員六名、山梨支部より十名が参加、快晴に恵まれ楽しい山行であった。

⑥ 農大ワンゲル事件に対し本会として声明書を出すべきか否かについて検討の結果、会としては出す必要がないとの結論に達した。

常務理事会 (六月十日・ルーム)

▽出席者 加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野常務理事、川上理事、

▽議事及び報告事項

(1) 明治生命、夏山展「雲海を行く」後援依頼の件。七月十日(二十一日)大分明治生命館五階にて毎日新聞社主催で行うが、本件につき当会として後援することを了承した。

(2) 退任理事慰労会の件、六月二十三日赤坂風月堂にて行うことにする。

担当：飯野理事。

(3) ウェストン祭報告。
共同映画制作「登山をするためには」16mm2巻、推薦依頼の件。大塚理事に一任する。

(5) インド大使館メタ武官献送会の件、丹部、松田が担当六月二十一日有志により行うこととする。

(6) 六月小集会の件。六月二十九日、講師、藤島敬男氏。

(7) 経理、勘定科目、基金等整理の件につき飯野理事より提案あり。エベレスト勘定など整理することを了承。

(8) 会の事務用品として複写機、オリビエを購入することを了承。

常務理事会 (六月十六日・ルーム)

▽出席者 加藤、辰沼、大塚、松田、飯野各常務理事、川崎理事、東京支部、関口、山口各委員、

(委任) 松方会長、三田、渡辺副会長、松田常務理事

▽議事及び報告

(1) 東京支部運営費として五〇、〇〇〇円内払の件：承認。尚近日中に本部理事、東京支部委員懇談会を開いて意見を交換することにす。

(2) 去る三月の定例役員会で報告のあった韓国から訪日登山を希望してきた件につき訪日韓国登山隊組織委員会に対し招請状を出すことを承認：(担当各支隊支部長、折井評議員)

(3) 日本大グリーンランド登山隊に対し推薦状発行の件。宮原隊長より説明あり、本会内規「海外登山隊に対する推薦状発行規定」に基づき推薦状を発行することにす。

(4) 経理事務内規作成の件検討。飯野理事の作成した支払規定、旅費規定、会費納入規定の原案につき、その内容を審議。来る七月一日の理事、評議員会にかけた上で施行することをきめる。同時に実行予算案資料の提出依頼についても了承した。

(5) 明大隊、早大歓迎を六月二十四日開催することを決めた。

(6) 協会問題：大塚理事よりスポーツ少年団準備委員会出席報告あり、引き続き今後の運営方法につき協議した。(以上)

支部移転の便り

東海支部ルーム

移転先 名古屋市東区西裏町 1~30

電話 (49)-1337

ここは国鉄千種駅(地下鉄ちくさ駅)の近くです。ルーム連絡係として常時、吹原君がおりますから、是非お立寄り下さい。尚、毎月第3木曜に委員会を、第4木曜に集会を行っています。

会員係よりお知らせ

六月三日の理事会議事録にありますが、昭和三十六年以前からの会費未納者、あるいは既に退会された方でも、再入会ご希望の方には復活会員の制度が適用されることになりました。

この制度は、所定の手続(復活

3頁下段より

外務省にて、日高、三田、折井、辰沼、松田にてお目にかゝり、現地の事情、大使の御意見を伺った。その結果については、大体、四月二十三日付公電の通りであるが、日高氏の訪米の時期は六月二十四日アルジェで開催される第二回A会議にネパール国王がかけられるので、できるだけ早い方がよいということであった。尚大使の親任状奉呈の時期は八月下旬になる予定とのことであった。

(五・二〇) 組織委員会開催。日高氏の訪米の時期は、日高氏の希望もあって、加藤喜一郎氏からの報告をまとめて決めることにする。従ってネパール国王のアルジェへの出発前は時間的に無理で、七月上旬になる予定。

(五・二七) 組織委員会。石原東海支部長の帰国報告、外務省の見解等を

願ひ、復活会費三〇〇〇円納入)を済ませれば、同一人に対し、一回に限り、旧会員番号が復活使用されるものです。

お知らせの方向の中に、再入会ご希望の方がおられましたら、この制度をご利用下さるようお願いして下さい。尚、お問合せは会員係宛てお願いいたします。

名簿作成のため会報二四〇号にカードを同封しました。早急に、誤りの少ない名簿を作るために、まだ返送なさらない方は、一刻も早くお送り下さるよう、重ねてお願い申し上げます。

編集後記

今月は編集してみたら十七頁に

もとに訪米の意義と方法、時間的タイミングの問題等について協議した。

(六・一) 組織委員会開催。カトマンスより加藤喜一郎氏の書信が届き、これによると、(一)ネパール外務省当局と接衝の結果、ネパールの登山禁止は全面的なもので、その理由は明らかにされていないが、多分に政治的理由によるものと推察される。(二)現在の状況からみて、誰が交渉にでかけても無理と思われるので、日高前会長の訪米はしばらく見合わせた方がよいのではないかと……この点につき種々検討の結果、次の様な結論に達した。

(一)まだ準備期間に若干の余裕はあるが、今後短時間の間に事情の好転は考えられないので、一九六六年ブレンススーンの計画は登山再開まで延期する。

(二)従って日高前会長の訪米もとやなつてしまった。仕方がないので一頁分を八月号に残すことにした。

松田君は「豆ちゃん」という仇名をもっているが、書く方も実にマメである。会社の方が忙しく残業ばかりしているのので、会報の原稿の方は毎晩徹夜だそう。よく続くものである。近頃JACの役員会は議題が多く遅くまでかかるので閉口だが、これも松田君の熱心と夜業癖の賜物であろう。我慢してあげるべきか。奥さんもなかなかの勉強家、夫婦共稼ぎというところだが、両方とも一文にもならないのだからお金の毒。然し実はそれで結構楽しんでるのかも知れない。

(吉沢一郎)

める。

(六・三) 定例理事会に報告、理事会は六月九日開催のエベレスト委員会の承認をもって計画を延期することを了承した。

(六・九) 第六回エベレスト委員会開催。一九六六年のエベレスト登山はネパール政府の許可ある日まで延期することは決定。尚先年納入した登山料は其の保固国政府にあずけ、後日の許可に備えることにする。

(六・一〇) 外務省、文部省、NHK、毎日新聞社等関係先を訪問、エベレスト登山の延期を説明、各々了承を得た上、午後日本体育協会記者クラブにおいて正式に計画の延期を発表した。尚、エベレスト委員会及びこれに所属する各委員会は、そのまま存続することになった。(文責・松田)

芳野利夫氏夫妻アラスカへ

会員 芳野利夫氏 (36) は Arctic Institute of North America の招聘により、地球及び電波物理の研究のため Icefield Ranges Research Project, Kluane, Yukon Territory, Canada の研究員として、下記予定でアラスカに向うことになっている。菊子夫人 (28) の同伴は自費である。7/28 羽田発、7/25~8/15 (Kluane, Upper Hubbard Gl. の調査及び登山)、8/28~アンカレジ、ワシントンにて米電気学会シンポジウム出席、9/5に Point Barrow へ行く予定との事。

昭和四十年七月二十日発行

東京都渋谷区神宮前 三ノ三 一 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

価額五十円 電話(電)六五〇(一)五

印刷所 株式会社 技報堂